

Y15a 近代初期の学術書による地球惑星科学用語の翻訳語の混在

玉澤春史（京都大学、京都市立芸術大学）

近代自然科学の知識が流入するにつれ翻訳語が新たに作られるが、一度に決まったわけではなく、一部の用語は新たに作られるも使用頻度は下がり、結果として一つの用語にまとまっていった。日本語の場合、訳語の形成はより複雑であり、中国や日本で新造、あるいは転用し、さらには一部がもう一度中国に戻って使用される場合があった。新造したのも日本人、中国人、来訪した外国人によるものと多岐にわたる。外国名の漢字表記が地理の各書物で行われたのと同様のことが自然地理学にも隣接する天文・地球惑星科学現象に関する用語でも起こっている。現代における天文学・地球惑星科学に関する用語は当時の博物、物理、地理といったさまざまな分野の専門書に書かれており、また流入経路も各国で執筆された書物を經由するため、用語の混在が見られる。江戸末期にオランダの書物を抜粋翻訳した『玉石史林』ではオーロラに相当する語として「北光」をあてており、その後の明治初期の教科書などでも使用がしばらく見られる。一方、中国に来訪した外国人の手による『地理全志』や『博物新編』ではオーロラを表す語として「北暁」の語彙があてられ、前掲の書は日本国内でも広く読まれていたが、その後国内で執筆された教科書ではあまり使用されず、用語としては定着せずに至った。記述内容を比較すると光学としての扱い、また地球電磁気学的な扱いが混在した状況であり、近世以前の天変地異として扱われていた諸現象が理解され整理されつつあった近代においても日本ではまれな現象の用語は定訳が決まるまで時間がかかったと推定される。